
twins evening ~ 夕闇は音もなく ~

つなまよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t w i n s e v e n i n g 夕闇は音もなく

【Nコード】

N 5 2 6 0 Q

【作者名】

つなまよ

【あらすじ】

北は魔法、南は科学が支配する世界。そんな世界の北端に位置する谷に住むセラフィナとアドーニス。谷は平和で、双子である二人は幸せな生活を送っていた。しかし、ある時、谷の近くの国（通称帝国）が谷を攻めてきた。その目的はなんとセラとアド？！それをきっかけに二人は過去の因縁、現在の陰謀に巻き込まれていく。

ってという話になることを願ってますw

主人公紹介（前書き）

はじめまして。ジエンナといいます。初めてなので拙い文章ですし、展開も……。つてところがあるかもしれませんが、温かく見守って頂けると嬉しいです。一応、残酷描写はいれるつもりですが、ちゃんとできるかは分かりません。それでも、そういうのが苦手な方は注意してください。

主人公紹介

主人公その1

セラフィナ

愛称はセラ。アドーニスの双子の妹。ぱっちりした淡い緑色の眼が特徴的。

流れるような銀髪を腰までのばし、いつも眼と同じ色のリボンで一つにまとめて片側に垂らしている。

おとなしい性格だが、戦闘センスは天才的。愛剣は伸縮自在の魔剣で、うす青いオーラで覆われている。魔法にも秀でており、特にイメージ系の魔法やヒーリング系の魔法、攻撃系なら風や光属性を最も得意とする。母の形見であるペンダントを大切に、肌身離さず持っている。料理が苦手。

主人公その2

アドーニス

愛称はアド。セラフィナの双子の兄。やや切れ長でアイスブルーの眼を持つ。髪はセラと同じ銀色。

基本はクールで口数が少ないが、妹思いで、2人の時はまれにデレる。正統派ツンデレ。料理上手。

武器は主に弓。（全体にうつすらと緑のオーラをまとい、射程距離は200mにもなる）

ダガーも使う。（二刀流）

結界系の魔法なら右に出る者は殆どいない。水、氷、雷属性の魔法を得意とする。

夜目が利く。線は細いものの、圧倒的なパワーとスピードを誇る。

セラフィナの日記より

685年 5月15日（晴れ）

きょうは、道に人がたおれていたのを見つけました。

ごはんをあげるとすぐよくこんでくれました。

おながへってたらしいです。

その人は、いろんな所を旅してまわる旅人さんで、いろんな所のお話をしてくれました。

アドは旅の話のにきょうみしんしんで、

「ボクも大きくなったら旅にでる！」

って言っていました。

でも、わたしは大変そうだし、旅なんていやです。

だってお風呂もなかなか入れないし、おいしいものもなかなか食べられないからです。

よるごはんはアドの作ってくれたオムライスでした。

おいしかったです。

セラフィナの日記より（後書き）

次回からちゃんと物語が始まっていく予定です。（いつになるか分かりませんがww）また見てもらえると嬉しいですよ。

朝は・・・

『終わりとは始まりである……』

始まりとは終わりである

……』

朝日が柔らかな光を世界に投げかけていた。
とある家があった。

家にはベットがあった。そのベットの上にはシーツの山が乗っかっていた。

家の中に澄んだソプラノの少女の声が響く。

「早く起きないとアドの分まで朝ごはん作っちゃうよつ。さつき、隣のマリカおばさんおいしい卵を持って　きてくれたのになあ……」

「……やめてくれ——。」

シーツの山の中から呻き声が聞こえた。少年の声だ。

それから、少しずつ少しずつ、少年の……アドーニスの寝癖のついた銀髪が出てきて……。

「遅いつ」

ソプラノの声の少女……セラフィナが痺れを切らしてカーテンを開け放ち、シーツをひきはがした。

「うわぁ・・・ああ・・・まぶしいだろっ・・・ううっ」

不満そうな声をあげたアドを、薄情にもセラはきれいに無視^{シカト}。かわりに

「早く着替えてごはん作ってね」

と、声をかけながら部屋からでた。

勿論、顔はいちいちアドの方に向けたりしない。

「はいはい。」

呟きながらアドは着替えはじめる。

いつものパターンだった。

――――

「ねむい……。」

俺は着替えながらもう一度呟いた。

向こうの部屋からセラが急かす声が聞こえる。

「今行くからっ。朝から騒ぐな。」

とりあえず怒鳴り返してから急いで用意を終える。

今日はリユナとローザという傭兵上がりの夫婦に武術を教えてもらう日だ。

この夫婦は12、3年前に、この谷に流れ着いたらしい。

ここを気にいって、集落から少し離れた森の中で住むことにしたのだと本人達が言っていた。

「よしっ。」

俺は勢いよく扉を開き、

「……………」

絶句した。セラが…朝ごはんの用意を少しでもしようと思ったのか…食器を両手いっぱい抱えていた。そして、そのままよろめく。なんとか持ち直したが……一番上のグラスが滑り落ちた。

「ったく。」

朝っぱらだというのに、俺は持ち前の瞬発力を生かして飛び出し、さっとグラスを受け止める。そして近くのテーブルに置いてから、

「お前なあ……。いつもいつもこうなるんだから…学習しろよ。」

呆れて怒る気にもならなかったが、一応言っておく。

「えへへ……。ごめんね。それよりご飯は？」

セラはなによりご飯が大切らしかった。

「……。今作るから座つてろ。」

「やったあっ！」

ともかく…俺たちの日曜はいつも通り、慌ただしく始まったのだっ

た。

朝は…… 其の2（前書き）

なんで書いたかよく分からないような場面です。

最悪、読み飛ばしても話の流れになんら影響はありませんw

（ホントになんで書いたんでしょ……。）

朝は…… 其の2

「ごはん、まだできないの？あ、手伝おうか。」

「いや…いい。もうできる。こっちに来るな。」

アドがまた作業に戻る音がした。

ほどなくして、私の前に湯気の立つカップや香ばしく焼きあがったいい香りのする

ムファル（小麦粉を練って香草や野菜、干し肉を混ぜ込んだ生地で作るパンのようなもの）、
ふわっふわのオムレツが並べられる。

「ほら、食べ」

「うん。」

にこつと笑って私はオムレツをほおばった。

「おいしい。」

アドはそれについて何も言わなかったが、嬉しそうな顔になり、私の正面に座って朝食を食べ始める。

「ん…ごちそうさま。」

暫くして私はごはんを食べ終わり、立ち上がった。

そのまま食器をシンクに運ぶ。

……途中で躓いた。

落としたものはないし、大丈夫！だよね……w

朝は…… 其の2（後書き）

短いすねww

次からはちゃんと話が流れていきます！（多分）

生温かい目で見守ってくださいww

頑張りますので……。

急げ。やべえぞ。また遅れる……。

二人が家を出たのは太陽がずいぶん高く昇ったころだった。

「ったく。また遅れた。」

「それはアドが早く起きないからじゃ……。」

「分かってるって。ほら、急ぐぞ。」

「うん。」

それぞれ自分の得物と弁当を抱え、数百メートル先の小さな小屋を目指して猛ダッシュする。

暫く走ると、森のそばの小さな小屋が見えてきた。

「おいっ。ローザ、さんが、もう、外で、まって、る、ぞ。」

アドが息も切れ切れに叫ぶ。

ちなみにセウは返事をする余裕さえない。

二人とも体力がそんなにない訳でもないし、走るのが遅い訳でもないのだが、

遅れた時、ローザの怒りようが半端なく怖いので、トップスピードで走っている。

そのおかげでもの一分で目的の小屋に辿りついた。
しかし……

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

「遅い。」

「「ひつ。ごめんなさい。」」

怒られた。

「あつ。ハモツたねえ。」

家からリユナさんが呑気に出てきたが。

ローザさんは静かに、慌ただしく辿りついた俺達を見ている。
ぜいぜいと喘いでいる俺達を静かに見つめている。
……かなり怖い。

「これ、何回目だと思う？」

ローザさんはあくまで静かに、静かに問うた。

「え……えと……。わ、分かりません。。。」

セラがおどおどしながら答えた。
軽く涙目になっている。

来るたびにこうなんだから、そろそろ慣れるよ。おい。

「アドもつ。あんた、その分だと全っ然反省してないね。」

やべえ。声に出してたみたいだ。
リユナさんが笑っていた。噛み殺そうと必死だが、すげえ漏れてるし。

ローザさんは暫く俺達を睨みつけていたが、

「ま、今度からは絶対早く来なさい。」

と言ってプイッとそっぽを向いてしまった。

ちなみにこのやり取り、すでに数えきれないほど繰り返している。

「ま、早く練習始めよう。それともご飯が先？」

リユナさんのこのセリフも何度も聞いた。

「練習が先でしょ。」

ええっ。ローザさん。おなか減った……。ってセラが。

「どうせあんたが朝、起きられなかったから遅れたんでしょくに。」

……。でも後悔はしてねえ。だって眠かったし。いつものことだし。
てか、俺また声に出してたんだ。
セラが向こうで、そうだそうだった。とか私はおなか減ってないっ。
とか言ってるけど、この際無視。

「じゃあ、始めようか。」

リユナさんが笑いながら言う。

俺もしゃあないな、と、弓を用意し始めた。

その時……

世界が揺れた

急げ。やべえぞ。また遅れる……。 （後書き）

分かりにくかったとおもいますが、ローザさんが妻、リユナさんが夫です。ローザさんのイメージはある女用心棒、リユナさんは女用心棒の嫁www（爆）です。分かりますでしょうか？

あと、アドがツンデレになってくれません。どうすればいいのか…

…w

まあ、いつも言ってますが、がんばります（、・ω・、）

セラの日記 其の2

691年7月16日（晴れ）

どうして？どうして？

ローフェル帝国が谷に攻めてきた。

どうして？今までそんな素振りも見せてなかったのに……。

それに、谷の人々も。

ローフェル帝国って分かった途端、私たちをすぐ逃がそうとして……。

私たちも戦えるのに。

どうして「帝国ならダメ」なんだろう。

帝国が戦争に強くて、大変なのはわかる。

でも、私たちだって谷を守りたい。戦わせて欲しい。

帝国には、何かあるの？

分からない。

それでも、私たちは谷を出た。

谷の人は私たちに沢山の魔法石を持たせてくれた。
マジックストーン

これから、隣にある「アルティラ神国」という国まで行く。

リユナさんとローザさんが昔雇ってもらっていた国だそうだ。

谷からは北西に120?行った所にある。

北西方向にある森を、馬で1日中走って着くか着かないか位の距離。

でも、旅に慣れない私たちは1日走っても森から抜けられなかった。

だから今日は森の中で野宿だ。

帝国の兵がいるかもしれないし、獣や魔獣にも気を付けなければいけない。

正直怖い。アドはどうなんだろう。

明日には「アルティラ神国」に着かなくては。

……今日はもう寝よう。ホントにいろんなことがあった。

アドが先に不寝番をしてくれるらしい。

はあ。疲れた。疲れたよ……。

セラの日記 其の2（後書き）

次はアルティラ神国に向かいます

二人には頑張ってもらわなくてはWWWWW

なんとか頑張らせなくてはWW

早速修羅場フラグ立ったよ（前書き）

久々です。なんか長くなった。。

よく分からない事になったので適当に読んでください。

早速修羅場フラグ立ったよ

「ア…アドっ！寝ないでっ！！落ちるっ。馬から落ちるって！！！」

セラのかなり焦った声で、俺は途切れそうな意識を必死で繋ぎ止める。

これは、マジでヤバイ奴だ。ねむすぎる。

しかも……

『おゝらあつ。そこの二人っ止まれええええつつっ』

なんか追いかけられていた。

後ろから罵声や足音が、どたどたと迫ってくる。

それにしても眠い。

どうして俺たちが早くも、こんな危機的状況に陥っているかという
と、話は暫く前まで遡る……。

――――

最初に不寝番を俺がやることにしたのが、失敗の始まりだった。
何事もなく、自分の担当の時間を終えた俺は、セラを起こすべく立ち上がった。

「おい、起き……ろ……。」

声をかけながら、がくがくと揺さぶる。
しかし――。

起きない。ぐっすり寝ている。

今日は見つからないように、魔法を使えばなしかったから疲れたのだろうか。

カモフラージュの魔法は、割と簡単に魔力の消費も少ない。

だが、ほぼ1日中使い続けていたから疲労はかなりのものだったのだろう。

俺は、戦闘になった時の為に魔法は使っていなかったし、夜も強いしな……。

あいつを、寝かせておいてやってもいいだろう。

ということでは3時間後――。

空が白み始める。

正直、俺は退屈し始めていた。

退屈すると眠くなるのは、人間の本能っていうかで。

俺は眠たくもなり始めていた。

でも此処で寝るとぜってー起きられねえよな……。

などと思いつながら、それでも眠くなりすぎて、

「セラ、起きろ。起きてくれ。」

セラを起こして、そのまま寝た。

セラは訳分からんって顔をしていたが、お構いなし。
意識が飛んだ。

「アド、起きてっ。起きてってば。」

セラが耳元で叫んでいた。

眩しい。太陽が頭上にあつた。

意識が飛んでから一秒とたつてないんじゃないのか、これ。

まあ、太陽の位置でそんな訳ない、かなり時間がたっている、ということは分かるけど。

「まだ寝させてくれよ……。」

色々考えていた（つていうか頭に浮かんた）が、やっぱり眠い。うん。

「こうなるなら、ちゃんと起こしてくれれば良かったじゃんっ！もう。」

セラが叫んでいる。

んなこと言われてもなあ、お前起きなかったし……。
ぼんやりとそんなことを思いながら、寝……。

「起きろおおおおおっつっ！……！！！」

魔法で声を拡張したらしい。鼓膜がやぶれそうだった。

「うるせえっ。耳が聞こえなくなっだろうがぁーっ。」

俺も、これにはさすがに目が覚めたし、キレかけた。
さらに文句を言おうとしたところで、

「黙って。人の気配がする。帝国かも」

セラがいつになく真剣な顔で囁く。俺らは出発する前に、帝国の奴らが追ってくると思うが、絶対捕まるな。と、いやになるほど言われていた。理由は分かんが、俺も捕まりたくないし、分かったと返事していた。ちなみにセラの耳は何故か異様に良い。良すぎる。俺には到底聞こえないが、何か聞こえているらしい。

「ヤバ、近づいてるかも。早く出発の準備して。音は立てちゃ駄目。気配も絶って。」

言われるままに準備を始める。ものの三分で準備は終わった。が、そのころには俺の耳にも、帝国の兵と思われる人達のたてる音が聞こえていた。これでは、逃げるに逃げられない。

「ま、魔法でなんとかやりそこそつ。えと、アド、こっちに荷物まとめて。」

セラの焦った声。

俺も急いで荷物を一か所にまとめて、セラのそばに寄る。

「いくよ。」

ルーンを唱え始めるセラ。セラの全身が魔法のオーラで包まれている。

ルーンが完成すると、緑色のセラのオーラが、俺や荷物やらを包み込んでいった。

「よし、もう大丈夫！多分」

いや、多分て……。

まあ、俺もセラの力を知っているから何も言わないが。

カモフラージュの魔法は、自分たちの存在を隠す為の魔法だ。見えなくするのは勿論、音を聞こえなくしたり、気配を隠したりもできる。しかし、マナを行使して魔法を使っているわけだから、その痕跡は残ってしまう。ルーンマスターが見れば、ばれてしまう（こともある）のだ。その点、セラは魔法の痕跡を殆ど残さずに魔法を行使することが可能だ。しかも音、気配ともに完全にシャットダウン。俺にはどうしたらこんなことが可能なのか、皆目見当もつかない。

「なに真面目に解説してんの？早く行くよ。」

更に、移動中も行使可能。っと。

術者から離れてしまえば、魔法が切れやすくなるんだが……。
セラは、そんな常識をものともしない。

「だから、真面目に解説ばっかしてても、読者はつままないって。」

いや、解説しねーとわからんだろ。

あと、読者は禁句じゃねーか？

「つべこべ言わないっ。はやくはやく。」

「せっかく気を利かせてやったのに。」

「あんだ、ホントにツンデレキャラなの……？」

「キャラとか言うなっ！」

はあ、コントかよ。これ。
なんか疲れた。

「とりあえず、行くよつ。逃げなきゃ。」

そうだ、そういえば危険な感じになってたんだつた。

馬に乗って進みだすセラ。俺も急いで馬に乗り、あとを追った。
人の話声は、さらに近づいていた。

『おい、あの空き地じゃないか？さっきあの辺りで、声がした気がするんだ。』

場所が特定されたらしかつた。見えない筈とはいえ、やっぱり怖い。
空き地から一本だけ伸びた道で、馬を駆っていく。

と、前を進んでいたセラが不審な動きを見せた。
要するに、急に止まったのである。

「うわつ。」

俺も急いでストップ。馬が驚いて前足を浮かせ、嘶いた。

がさつ

凍りつく俺達。前足を浮かせた時、はずみで茂みを揺らしてしまつたらしい。そして、セラのすぐ前にはセラを止めたもの。詳しく言うと 帝国兵×2 がいた（あつた）。物音は、気のせいで済ませるには大きすぎた。帝国兵達がこつちを見る。俺達は見えていない。しかし、俺達のつけた足跡が、点々と続いていた。それは今いるところまで続いているわけで。

「おい……。あそこに誰がいるよなあ。目当ての奴らか？」

「え、でもさ、こんな極秘で探されてる銀髪の少女と少年だろ。なんかやばそうじゃん。どうやって捕まえるのさ。」

……。修羅場フラグ立ちました。
とりあえず逃げるか。

んで、逃げた。とりあえず。。。で、見つかってああなっただって訳だ。それにしても……。眠い。。

早速修羅場フラグ立ったよ（後書き）

これから、そんなにこだわらず、とりあえず進めていこうと思います。

なので、文章とか乙だと思います。。だっていきなり綺麗になんて無理でしょ。なので、練習みたいな感じでがんばります。

アドのキャラがよく分かんww

逃亡中ですうっ（前書き）

久々の投稿。もっと頑張って書きやがれWWW

逃亡中ですうっ

さっきまで、私達のことヤバそうじゃんって言ってたじゃない！！
なんでこんなに真剣追いかけてくるのよっ。もう。アドは寝そうだしっ！後ろから蹄の音がどんどん大きくなってきてるし。どーすればいいのよっ、もう。

帝国兵に見つかったあと、私達は必死で逃げ続けた。というか、今も逃げてる最中。前に立ち塞がった兵士を飛び越えて、馬を走らせ続けていた。すでに、馬は荒い息を吐き、玉のような汗を滴らせている。これは…途中で迎え撃つしかないかもしれない。

「セラっ！」

アドが話しかけてくる。大丈夫なのか、こいつ。とか、内心は不安でいっぱいだけど、とりあえず答える。

「覚醒の魔法があつただろ。それを俺に使ってくryt……。」

え、え、アド、もしかして寝た？えっと、覚醒の魔法って。かけっちゃったら、しばらくは全然起きてられるけど、魔法切れると動けなくなるよ？リスク半端ないよ。。でも、アドは既に目を閉じている。ギリギリ起きているけれど（気配で分かる）、もうあと何分持つか……。

唐突に、風の音が変わった。今までより、自由な感じに。この音をなんと表現したらいいのか、私には分からない。でも、これが何を示しているかなら。この先に広場がある。迎え撃つなら、そこ。迎え撃つしかない。これなら。覚醒の魔法を使っても大丈夫かもし

れない。というか、使わないとヤバイ。

と、そこで広場に出た。大体予想通りの場所。急いで広場に駆け込んで、入口にシールドを張る。後ろから迫る帝国兵はこれで足止めできる。ただし、持って数分だけど。あまり強力なのは時間がかかるから、簡易式しか張れない。

急いで馬から降りて、アドに駆け寄る。アドの馬は、私の馬が止まったのを見て、止まってくれたみたい。アドはすっかり眠り込んでしまっていた。

「こんなことになるなら、ちゃんと起こしてよ。もう。」

一応文句を言うが、アドは反応しない。って寝てるから当たり前か。

「もう。」

もう一度呟いてから、私は覚醒の魔法をかけ始めた。

【眠りを司る精霊、快眠の精霊、マルガリーラ。彼の者から快眠を奪え。彼の者の眠りを奪え。静かなる時間は終わり、動き始める時が来たのだと。覚醒の時が来たのだと彼の者に告げよ。覚醒の時間が終わりを迎えし時、彼の者は更に深き眠りにつくであろう。】

魔法にはいろんな流派があるけど、私が使うのは一番昔からある、精霊を役使して魔法を行使する方法。魔法をかけ終わると、マルガリーラの、くすくすと笑うような音が微かに辺りに満ちる。もっとも、それを感じられるのは私だけだけど。

「ん。ううん……。」

魔法をかけ終わると同時に、アドが目を覚ました。

そして、

シャランッ

鈴のような音と共に、シールドが崩れる。飛び込んでくる帝国兵×
2。すぐに私達を見つけて剣を構えた。

——やはり、ここで戦うしかないみたい。

逃亡中ですうっ（後書き）

今回はセラ視点。補足を1つ。

セラが使う魔法は、ほぼすべて精霊を呼び出して行う魔法。今は、ほぼ廃れてしまっていて、使い手はごくわずか。一般的には、マナと呼ばれる魔法エネルギーを使い、魔法を行使する方法が多い。マナは世界中に普遍的に存在している。

精霊についての細かい設定は、今考えてるところですwww
また、ここに書くかも

次回も、気が付いたら読んでやってくださいw

迎え撃ちます。はい。(前書き)

短いWWW

迎え撃ちます。はい。

俺の意識がはつきりするのと、セラのシールドが崩れるのはほぼ同時だった。そして飛び込んでくる顔面凶器×2（↑帝国兵）。顔がゴロツキっぽいし、雇われた傭兵なのかもしれないが。

……ツヨカッタラヤダナ。。

え、ええと。で、その顔面凶器達は、俺達の方に剣を向ける。平和なムードは0。しかし、その動きで俺は気付いた。こいつら、あんまり強くない。しかも本人は気付いていないだろうが、其の一（俺命名）の方は、剣の切っ先が微かに震えていた。俺達のことビビってんのかな？相方にビビってんのかな？相方はなんか偉そうだし。どちらでもいいが、怯えているのは好都合だ。正確な判断が出来なくなるからな。と、その時、其の一の上司っぽい奴（面倒なので後は其の二）が前に出て、

「武器を捨ててこっちにきよいつ、じゃなくてっ。来いつ！」

思いつきり噛んでくれました。声裏返ってるし。セラは笑いを噛みこらえるのに必死だ。仕方ないので俺が対応することにした。

「だが断るっ！」

セラが吹き出した。セラの笑いのツボはよくわからん。

……しかし。帝国兵さんたちのお気には召さなかったようで。。

「お前ら、ふざけるんじゃないっ。」

真剣怒鳴られた。で、いきなり斬りかかってくる。其の一の方が俺で、其の二はセラに。全然遅い。楽々迎撃する俺とセラ。一合、二合…と斬り結ぶ。無駄な動きは多いし（特に其の二）、これだけ実力差があるのに生け捕りにしようと頑張ってるみたいだし、殺ろうと思っただけなのに……。

……すぐに？

あつちは、本気だ。いくら弱いからって、本気で俺達と戦って、捕らえようとしている。試合じゃ、ない。俺達は逃げ切れないからここで迎え撃っている。俺達に、奴らを殺^ヤる覚悟は……あるのだろうか。

「きやつ。」

セラの叫び声。見れば、セラが木の根に躓き、よろめいていた。しかも、その一瞬で其の二が何かを取り出し、セラに突き付けた。

其の二が手にしていたのは。

あれは……拳銃？

迎え撃ちます。はい。（後書き）

こんだけ時間かけて、このクオリティー&量かよw w

はい、すみませんw

初めての（前書き）

長く見えるけど文字数少ないw

初めての

この世界は、北と南に大陸が一つずつあり、その周りに無数の島が散らばっている。北と南の間にはひたすらに海が広がり、北と南の大陸で殆んど行き来がなかった為、それぞれ独自の文化を作り上げた。自然が豊かで、生命の力が満ち溢れていた北では魔法が、鉄鋼・石油資源が豊富で、さまざまな道具を作り出すことのできた南では科学が、それぞれ発展していったのだ。やがて技術の発展により海を渡り、それぞれの大陸を行き来できるようになった。が、行き来するものは殆どおらず双方の文化は全くとっていいほど交わっていない。

俺が昔読んだ本には確かにこう書いてあったし、実際、南の大陸の話なんて殆ど聞かないのだ。それが、なぜ。。。南の大陸の物である拳銃が、北にあるのだろうか。

「おい、お前。武器を捨てろ。」

其の二が凄む。怖くない。けど、拳銃がどんなものかわからない。拳銃について書かれた本には、イラストと名前しか書かれていなかった為、細かい用法なんかは分からない。

「ア…アドっ!!」

セラが俺の名前を呼んだ。其の二の注意が一瞬セラだけに向く。その一瞬を逃さず、俺は腰に差したダガーを其の二に向けて投擲。振り向きざまにもう一本のダガーを其の一に突き立てた。

胸の、鎧の隙間に、もはや解剖学的な、正確さで、ダガーは、吸い込まれて、いった。

てに、つたわる、肉を貫く、しめった感触。

はじける心臓。

目の前では、名も知らない哀れな兵士が、野を斑に染めながら屑折れていく。

あ

ああ

あ

あああああ　あああああ　あああああ　あああああ
 あああああ　あああああ　あああああ　あああああ
 あああああ　あああああ　あああああ　あああああ
 あああああ　あああああ　あああああ　あああああ
 あああああ　あああああ　あああああ　あああああ

「……アッ」

セラの声が聞こえる。

そして、俺の意識は闇の中に埋没した。

初めての（後書き）

初のグロ表現です。うーん。難しいww

次も頑張って書こう!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5260q/>

twins evening ~夕闇は音もなく~

2011年12月1日21時55分発行